

アモス書 5章 6-7、10-15 節
ヘブル人への手紙 3章 1-6 節
マルコによる福音書 10章 17-27 節

トリニティハウス前の「きんもくせい」が満開でした。執務室で「きんもくせい」の香りのディフューザーを使用しているのですが、内外でよい香りが漂っています。木曜日にやや大きな地震がありましたが、教会の敷地・建物に特に被害などはありませんでした。

さて、先週の福音書は、イエス様が離縁について教える箇所でした。その後、「聖餐式聖書日課」では省略されていますが、子どもを祝福するお話が続きます。そこでは、人々がイエス様に触れていただくために、子どもたちを連れてくるのですが、弟子たちはその人々を叱ります。それを見たイエス様は、憤り、「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（マルコ 10: 15）と有名な言葉を語ります。ここでも「弟子の無理解」のモチーフが描かれているのですが、彼らの無理解を通して、「神の国に入る人」とは、「子供のように神の国を受け入れる人」であることが明示されます。ただし、それがどういうことか、明確な答えは示されません。それは福音書全体から示されるからです。

子どもを祝福する物語の後、イエス様に質問をする男の物語が続きます。新共同訳に小見出しがありますが、そこには、「金持ちの男」とあります。この小見出しは、親切な説明ではありますが、物語の魅力を半減させています。なぜならば、彼は、「ある人」として突然登場し、失意のうちに立ち去った後、金持ちであることが判明するように構成されているからです。

お話は、「イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた」（マルコ 10: 17）ところから始まります。場所の詳細は不明ですが、「ユダヤ地方とヨルダン川の向こう側」（マルコ 10: 1）から移動していませんので、その地域のどこかであると思います。この節の重要な点は、彼の動作です。「走り寄って、跪いて尋ねる」、この行動は、「既定の病（思い皮膚病）を患った人」（マルコ 1: 40）を想起させ、彼がイエス様をしっかりと信頼していることを明示しています。彼は、イエス様を「善い先生」と呼びます。そして、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と尋ねます（マルコ 10: 17）。「永遠の命」という概念は、「旧約聖書」では、あまり登場しません。またイスラエルが存在する目的として明示されているわけでもありません。ただし、「ダニエル書」12章2節には「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入りある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」とあり、終末時の復活に類似する言説があります。この「ダニエル書」のギリシア語訳聖書は、この箇所と同じ単語もが用いられています。9章35～37節にある「自分の命」とは、言葉が異なりますが、10章30節

とは同じ言葉です。イエス様の時代には、ユダヤ教徒の中でも、死後の復活の命、あるいは永遠の命が信じられていました。また信仰の目標にもなっていました。この「ある人」もそのような一人であったのでしょう。

しかしながら、そもそも「旧約聖書」は、天地創造の初め、エデンの園においては、いのちに限界がなかったことを大前提としています。それゆえに、ユダヤ教の信仰において、大切な事柄は、死後の永遠の命への期待ではなく、この地上の生を全うするうえで、律法に基づいて、どれだけ正しい生き方をするかということです。この「ある人」は、律法に基づいた正しい生き方をしているという自信があったようです。だからこそ、さらなる信仰の目標として、イエス様に「永遠の命」について質問したのでしょう。

イエス様は、この「ある人」の質問自体にすぐ答えずに、まず彼の「善い先生」という呼び掛けに対して、「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない」（マルコ 10：18）と答えます。このイエス様の言葉は、唐突であり、またすこし意地悪にも思えます。またここで用いられている「善い」という言葉は、訳語が「良い」ではなく、「善い」となっているように、表面的なよさではなく、質的なよさです。ただし、特別な単語ではありません。イエス様は、最初に主なる神様以上に、「善いこと」について教える方はいないと、大前提を語ったのだと思います。その証拠に、次にイエス様は、「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ」（マルコ 10：19）と語り、主なる神様が与えたモーセの十戒から抜き出したような、掟を並べ、改めてこの男に提示します。

イエス様のこの答には、二つの方向性を示されています。一つは、主なる神様に対する方向性です。それは、永遠の命に関わる事柄が、主なる神様に対する姿勢に関連していることを示しています。もう一つは、人間あるいは隣人に対する方向性です。モーセの十戒に記された戒めを改めて持ち出すことによって示される、隣人に対する姿勢も、永遠の命に関連していることを示しています。これらの方向性が、二つではなく一つのこととして重要であることは、12章28～34節に登場する「一人の律法学者」がのちに示します。

イエスの子の教えに対した「ある人」の答えは、「先生、そういうことはみんな、子供の時から守ってきました」（マルコ 10：20）という断言でした。この発言は、年齢も含めて何の説明もなく登場する「ある人」ですが、過去も現在も信仰深くまた真摯な人間であったこと、そして今後もその歩みを継続するつもりであることを暗示しています。また彼が、神を愛することと隣人を愛すること、それらを自分はしっかりと守っていたと自覚していたことを示しています。しかし、そこに大きな問題点が存在したのです。

イエス様は、彼を見つめ、慈しんで「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」（マルコ 10：21）と語

ります。この「慈しん」という言葉は、「愛して」と訳すこともできます。イエス様は、突然現われた信仰深い彼を愛したうえで、財産を売り払い、貧しい人に施すことを求め、そしてイエス様に従うことを求めるのです。

イエス様の言葉は、彼に大きな衝撃と悲しみとを与えます。理由は、たくさんのお金を持っていたからです。しかし、イエス様が彼に求めた大切な事柄は、とにかく単に財産を捨てることを求めたのではなく、なぜ今財産があるのかと言うことと信仰とを結びつけることにあります。

イエス様の時代は、貧富の差がかなり激しかったと推測されます。中間層、あるいは中流という概念は存在しません。そのように述べますと、現代社会の方がよいに思えますが、地球規模で考えると、あまり変わらないかもしれません。しかし、律法がしっかりと機能している社会では、貧富の差は是正されるはずでした。主なる神様がそのような社会を許しておられないからです。その意味では、現代世界よりも、律法がしっかりと機能しているはずの社会の方が、良い社会となる可能性があります。

しかし、そのような社会的状況の中で、この「ある人」は主なる神様に熱心に祈り、またモーセの十戒を代表とする戒めを忠実に守ってきて、そして、同時に豊かな人でした。つまりこの「ある人」は、直接人を律法違反という罪を犯すことはなくても、自らのところに富を集めることによって、貧困を引き起こし、その故に人を死に至らせていたと考えられます。また貧困から引き起る様々な律法違反を他者に起こさせていた可能性があります。この「ある人」は、富みと信仰と関係を見失って熱心になればなるほど、逆説的に彼は戒めを破ることになり、かつ永遠の命から遠のいていくことになるのです。小さい頃から主なる神様を愛し、戒めを守ってきたとはっきりと断言する彼は、今までそのことに全く気付いていなかったことを暴露したのでした。

主なる神様を信じる「信仰」という事柄を、主なる神様と個人との関係にのみ限定し、また精神的な営みに限定した場合、この「ある人」に何の問題もありません。むしろ、豊かでありながらも謙虚であり、信仰を失わない姿は、模範といえるかもしれません。しかし、それは主なる神様の一部分のみを愛することです。また、主なる神様が、自分を愛してくださっている愛に答えたことになりません。主なる神様は、単なる心の支えだけではなく、ご自身が創造された、この地上のすべてを愛しておられるからです。

イエス様が、「**あなたに欠けているものが一つある**」と語ったことは重要です。イエス様は、この「ある人」は、重要な一点を除いて、すべて完璧であるかのように語っているからです。失敗ばかりの弟子たちとは、大きく異なります。そして、そうであるがゆえに、このイエス様の言葉は、「ある人」が重要な分岐点に立っていることを示しています。だからこそ「**わたしに従いなさい**」と語るのです。それはその分岐点でどの道を選ぶかのヒントであり、またこの「ある人」が求めている永遠の命に至る道への導きです。しかし、この「ある人」は、その道を選びませんでした。「**その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去っ**

た」からです。そして、物語の語り手は、その理由を、ただ一節「(彼は) **たくさん**の財産を持っていたからである」(マルコ 10 : 22)。

語り手は、「たくさん**の**財産を持っていた」という以上に何も説明していません。それゆえに様々な想像ができます。彼は結局、富を愛して、主なる神様を愛さなかったという解釈もできますが、この「ある人」の問題は、そのような単純な話ではないと思います。彼の財産がもし受け継いだものであったならば、そこには責任があります。そして彼が責任感の強く正しい人であったならば、簡単には自分の受け継いだ財産を捨てることはできなかったと思います。そうであったならば彼は、財産のある一族・家庭に生まれた時点で、すでに「永遠の命・神の国」から遠かったのです。

この後すぐに、弟子たちに対するイエス様の教えが続き、神の国に入ることと、財産を捨てることとの関係が述べられ、神の国に入ることの困難さに、弟子たちは衝撃を受けます。しかし、そこでもイエス様の言葉が響きます。「人間にできることではないが、**神にはできる。神は何でもできるからだ**」(マルコ 10 : 28) そこでペトロは、思い出したかのように自分たちは、何もかも捨ててイエス様に従ったと言い始めますが、イエス様は、第一回受難予告の時に、「**わたしのためまた福音のために**」命を失うものはそれを得る、と語った形式と似た語り口で、財産を失ったものは、それを後の世で受けると教えます(マルコ 10 : 29-30)。

この「ある人」は、悲しみながら立ち去りました。しかし、イエス様の「**神にはできる**」という言葉は、彼が永遠の命に至る可能性を否定していません。それは、「永遠の命」を得ること、あるいは「神の国」にはいること、それは、人間の努力で達成する事柄ではなく、まさに主なる神様にすべてをゆだねたときに実現する事柄であるからです。この「ある人」が、イエス様の言葉を忘れない限り、その可能性は消えないのです。それは、最後に加えられている、「**しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる**」(マルコ 10 : 31) が示しています。この「ある人」は、生まれたときから律法を守り、信仰者の「先」にいました。しかし、もしイエス様の教えを忘れなければ、最後となるかもしれませんが、神の国に迎えられる可能性はあるということです。それは人間が条件を付けて決めることではなく、主なる神様が決める事柄に他ならないからです。

彼の姿は、永遠の命を得るとは何か、神の国に入るとは何か、言い換えれば、信仰とは何か、を究極的に示しています。それらは、ただ地上の事柄を無視して、主なる神様に求めるものではありません。また、地上の不正義に対して、徹底して戦い勝利しなければ、得られるものでもありません。このお話の前の子どもたとえにあるように、自分は、主なる神様と隣人がいなければ生きていけない、そう自覚することです。そこからその両者を愛する歩みが始まります。その歩みを続けまた、示す教会でありたいと思います。東京教区の中で先にある教会として、その歩みを示し続けていきたいと思います。